



エコクリティシズム研究学会

NEWSLETTER No.4 April 1, 2020

<http://www.ses-japan.org/>

— 目次 —

巻頭言「2019年の学会活動」	1
特別記事「ウルズラ・K・ハイザ教授来日記（2019年12月12～15日）」	2
エッセイ「言語復興の努力を垣間見る—アラスカ滞在記—」	4
エッセイ「タイルを追って」	5
シリーズ本紹介『北米先住民作家と〈核文学〉——アポカリプスからサバイバンスへ』	7
News & Information	8

巻頭言「2019年の学会活動」

伊藤 詔子（SES-J 会長）

2019年は本学会の前身であるエコクリティシズム研究会が発足して四半世紀が経過する25年目の節目に当たる。記念事業として共著の出版とUCLA英文科主任教授で、世界のエコクリティシズムをスコット・スロヴィック氏と共にリードし、エコクリティシズム第三の波を生み出した、ウルズラ・K・ハイザ教授の招聘事業を計画・実施した。ハイザ教授は現在、人新世（anthropocene）時代の文学のパラダイム構築を先導する真にグローバルな学者である。2019年12月12日より数日間広島、京都に滞在され、ハイザ旋風を巻き起こした。これについては『エコクリティシズム・レビュー』のほうで詳述する。

しかしながら4月25日には藤江啓子会員が、5月6日には松岡信哉会員が、全く思いがけず相次いでご病気で早逝された。その意味では耐え難い不幸な年でもあった。それぞれの追悼記事は『エコクリティシズム・レビュー』に掲載される予定である。学会の重鎮でもあったお二人を失うという大きな悲しみを乗り越えて、記念事業の共著のほうは、9月にお二人の遺稿を載せた『トランスパシフィック・エコクリティシズム——物語る海、響き合う言葉』が、10月には『トランスアトランティック・エコロジー——ロマン派を語り直す』がいずれも彩流社からほぼ同時に出版された。

この2冊は、藤江氏と松岡氏のここ数年のお仕事を集成した貴重なものとなった。『トランスパシフィック・エコクリティシズム』のほうは、現在小鳥遊書房社主でご活躍の高梨治氏の編集になるもので、5月より暑い夏中、高梨氏の大変なお世話になって、松岡氏の翻訳稿と論文を编者（伊藤、一谷、松永各氏）が編集してやっと完成した。総勢20名の論稿で、内7本はアメリカ、イギリス、台湾、ブラジルのエコクリティックの論稿を邦訳したもの。これまで手薄であった太平洋と環太平洋諸国の環境文学にかかわる国際企画である。松岡氏は当学会編集長であり、エコクリティシズム研究学会の集大成であるこの仕事の発起人でもあった。第一部〈太平洋を横断する語り手たち〉第三章リーガー氏の「フォークナー、三島、莫の自然・文化・ジェンダーの表象」の翻訳と、第三部〈環太平洋圏の核表象〉15章「終わりの後に——ポストアポカリプス小説とトランスパシフィックな想像力」が松岡氏のお仕事である。フォークナー研究と核とエコクリティシズムは、松岡氏の研究の中軸にあった。

一方副代表も務められた藤江氏の遺稿となったメルヴィルのマテリアル・エコクリティシズム研究は、この分野の先駆けとなる貴重なものである。我々と活動を分かち合ってきたイギリスロマン派科研「トランスアトランティック・エコロジー」の4年間の活動の集成で、ゲスト論者であった藤江氏のお宅の机の上に残されていた遺稿は、編者吉川朗子、川津雅江両教授と彩流社の真鍋氏によって見事に仕上がっている。これらは、今後の学会活動の礎となるものであり、お二人の残されたものは学会の血肉となって生きていくであろう。

待望の学生新入会員も多数迎えた年であり、次なる学会四半世紀に向けて会員とエコクリティシズムに関心のあるすべての方とともに歩んでいきたい。



特 別 記 事

ウルズラ・K・ハイザ教授来日記（2019年12月12～15日）

水野敦子（SES-J事務局）

UCLA 教授ウルズラ・K・ハイザ先生が、2019年12月12日（水）から15日（日）までパートナーのジョン・クリスチャンセン教授と一緒に広島に滞在された。ASLE 会長も務められた高名先生の招聘については2年程前から伊藤詔子会長が何度も連絡を取られ、ハイザ先生とお親しい牧野氏にもご助力頂き、多くの苦勞の末に来日を実現することができた。12日夜に真野氏の車で広島空港にお迎えに行ったが、山陽道がいつになく渋滞して宿泊先の広島全日空ホテルに着いたのは夜の9時半頃になり、ハイザ先生は広島空港程遠い空港は世界中にないと言われていたとのことである。



初日は伊藤会長と事務局の平瀬氏が宮島をご案内した。夕方からセミナーを予定していたため、宮島での滞在時間は2時間程であったが、伊藤会長の教え子でプロの英語観光ガイドをされている渡辺直子さんが厳島神社、大聖院、五重塔などの名所を手際よく案内して下さいました。ハイザ先生も宮司さんのお祓いや神社回廊の高舞台などについて渡辺さんの説明に興味深く耳を傾けられていたとのことである。セミナーはハイザ先生、クリスチャ



ンセン先生、伊藤会長、松永氏、浅井氏、一谷氏、ゴーマン氏、水野の計8名が出席し、平和公園近くの相鉄グランドフレッサ広島15階日本料理「吉水」で行った。昨年彩流社から出版した『トランスパシフィック・エコクリティシズム——物語る海、響き合う言葉』の執筆者が一人ずつ自分の論文について発表し、ハイザ先生とクリスチャン先生のお二人からコメントを頂いた。その後、広島の夜景を楽しみながら掘りごたつでの懇親会を開いた。

12月14日(土)は夕方から広島経済大学立町キャンパスで、中・四国アメリカ文学会主催、SES-J 共催で“Urban Storytelling

and Multispecies Futures”と題した特別講演があり、伊藤会長が司会を務められた。Karen Tei Yamashita の *Tropic of Orange* (1997), Harryette Mullen の詩 *Urban Tumbleweed: Notes from a Tanka Diary* (2013)、Kim Stanley Robinson の *New York 2140* (2017) など人新世についての多くのテキストを紹介され、都市の危機的エコロジーについて話された。講演後には、広島市内にある創作おばんざいの店 AGRI で懇親会が開かれ、挨拶されたハイザ先生はロサンゼルスでは多くの動物を飼っており、是非、泊まりに来てほしいと言われていた。



最終日の12月15日(日)は塩田氏、松永・ゴーマンご夫妻が広島全日空ホテルに迎えに行かれ、4つの大きなトランクを車2台に載せて広島駅にお連れし、伊藤会長と合流し一緒に新幹線で京都に向かわれた。



夕方から京都の同志社大学で科研のセミナー (SES-J 共催) があり、ハイザ先生は“Narrative and the Anthropocene”という題で講演された。先生はその後、東京に行かれ12月20日(土)にロサンゼルスに帰国されたが、お礼のメールを送ると、とても楽しい旅であったという返事が来た。

今回の招聘については、講演会のチラシ作成をお手伝いいただいた黒住氏をはじめ、多くの会員にお世話になった。以上簡単なお報告であるが、7月発行の学会ジャーナル(2020)でも伊藤会長が執筆される予定なので、そちらもご覧頂きたい。

言語復興の努力を垣間見る—アラスカ滞在記—

林 千恵子（京都工芸繊維大学）

2018 年、サバティカルを取得できたので、アラスカの州都ジュノーに半年間滞在した。主目的は、アラスカ大学サウスイースト校（UAS）で「アラスカ先住民族学」の最新動向を知ること、そして先住民族クリンギット（Tlingit）の言語のレッスンを受けることだった。

ジュノーがある、アラスカ州南東部をご存知だろうか。巨大なアラスカのちょうど「尻尾」の部分に相当し、太平洋に沿って細長く伸びる地域で、大小 1000 以上の島から成る。かつてのクリンギットの支配領土でもある。John Muir が「あらゆる文章表現が絶望的に役に立たないと思えるほど美しく、穏やかで、この世のものと思えない」と評した景色の美しさは健在で、毎夏大勢の観光客がクルーズ船でやってくる。



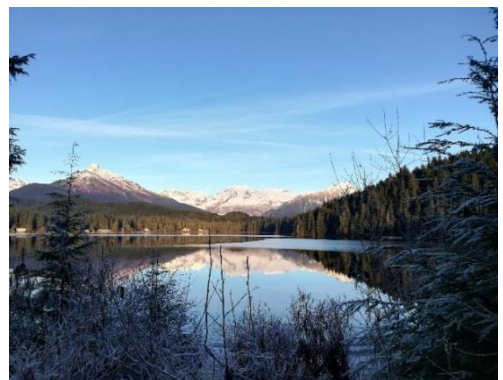
UAS Egan Library とトーテムポール

しかし、有名なのはグレイシャー・ベイ国立公園ぐらいで、観光地としてメジャーではない。どの町も、船か飛行機でしかアクセスできず、トーテムポールぐらいしか見るものがないからだろう。それでも、地元の人に焦燥感はない。観光に依存せずやっていけるほど豊かだからだ。例えば、この地域の四季折々の山海の幸の豊かさはどうだろう。秋に故郷へともどる 5 種類のサケ、ニシン、タラ、オヒョウ、ナマコ、海藻（クリンギットは各家庭で干す）、山には鹿、ムース、ライチョウ、ガン、多種のベリー類、山菜。食べ物にとどまらない。金や銅もふんだんに採れた。それを物語るエピソードがある。昔、対立したクランの二人のチーフが、武力ではなく富を顕示することで決着をつけた。船上から自分の所有する銅と銅の

装飾品を交互に海中に投げ捨て、先に尽きた相手を笑ったという。

ジュノーはこの豊饒な南東部にあり、州都機能も備わり、暮らしは便利である。大多数は地元っ子の「白人」、次いで代々暮らすクリンギット。「黒人」は人口の 1%、アジア人（ほとんどがフィリピン系）が 7%という町で、私は必ずこう質問された。「それで、なんでまたクリンギット文化を研究してるの」。（もっとも、質問するのは「白人」だけだった。）

これが一番困る質問だった。答えは「ネイティブ・アメリカン文学を研究していたけれど、親友になったアラスカ人の Ed Hays さんから、ネイティブの州であるアラスカを一度見るべきだと勧められ、彼の家がある南東部ヘインズに行くうちにクリンギット文化に傾倒した」ということになる。が、しっかりこない回答だった。現実には、勉強をやめようとしては踏みとどまる、の繰り返しだったから。クリンギットの子孫でもなく、彼らの言語が解せない自分が、研究する価値があるのかと悶々とし、限界を痛感する連続だった。中でも Thomas Thornton 氏の研究には「クリンギット文化研究とはこれぐらいの知識とレベルが必要」と思い知らされ、諦めがついてしまった。そのため、2017 年秋には気持ちの区切りをつけ、国立民族学博物館のイヌイット文化研究の岸上伸啓先生に、サバティカル期間に勉強させてほしいと願い出て承諾も得た。新しい世界を覗いてみようとする新入生気分でした 2018 年 1 月末頃、ごく短いメールが届いた。「まだ気持ちがあるなら(UASに)来てもいい」。クリンギットの言語復興の旗手、X̱'neei Lance



大学の裏にある Auke Lake。正面の山裾に見えるのは氷河

Twitchell さんからだった。サバティカル受入れについて打診したのがはるか4ヵ月以上前で、それに対する初めての返信だった。迷ったが、岸上先生に相談し、結局行くことに決めた。ドロップアウトしかけの私を、Xuneいさんが首根っこをつかんで引き戻してくれたような感じだった。

UAS では研究と並行して、Xuneいさんの講義と、Hans Chester さんのクリンギット語講座を受講した。特に、語学クラスの受講は念願だったので興奮した。週2回 19:30-21:00 のレッスンで、受講者 15~6 名。半数はクリンギットの人たちで、年齢も 20 代から 70 代までと様々。Hans さんの包み込むような人柄もあって、教室は温かい空気と学生の熱気で満ちていた。あるとき、受講生の 70 代の婦人が静かに皆に語ってくれた。「シアトルの小学校に通っていた時に、お母さんが先生に呼ばれたんです。『このままでは英語もクリンギット語もどっちつかずです。残念ですが、将来を考えて英語に専念させましょう』って。それでクリンギット語を諦めました」。母語を捨てさせることを決断した家族の思いはどんなだったろう。この婦人は、授業中に何度も幸せそうに言った、「Hans、教えてくれてありがとう」「勉強の機会をくれてありがとう」。聞いていて胸が詰まった。

授業が中だるみの時期にさしかかったときには、Hans さんが経験談を語ってくれた。歌舞伎の伝統にも似て、クリンギット社会では先祖の名前を継承する。Hans さんも名前を受け継いだが、その儀式の一番重要な場面で頭が真っ白になり、クリンギット語が出てこなくなった。長老たちは「大丈夫。私たちが君を守るから」と言ってくれたが、辛くて、悔しかった。そこから必死で勉強したんだ、と泣きながら語ってくれた。魂のこもった授業は、生徒を奮い立たせるのに十分だった。

アラスカでは先住民の 20 言語がまだ実際に話されている。言語の灯を守り、母語として取り戻す苦闘が続く。Xuneいさんは、部族社会の数多の役職をこなしながら、言語の第一人者として、教材と辞書の執筆、カリキュラム整備、初級から上級の授業担当を地道に続けてきた。学習者は倍増してはいないが、人々は機会あるごとに彼への感謝を口にする。言語の存続が、彼らの社会を支え、民族の誇りを支えている。もがいてもすぐに結果は出ない。それでも、もがかなければ可能性は見えてこない。Xuneいさんが、私のもがきに気づき、自分たちのもがく姿から何かを学べと教えてくれた、そんなふうに今は思っている。

タイルを追って

深井 美智子（神戸女子大学）



マジョリカタイルをご覧になったことはありますか？さまざまな文様が描かれたカラフルなタイルですが、それがおよそ 100 年前（大正中期から昭和初期の極めて限られた時期）に日本で生産され、アジアを始め各国に輸出されていたのです。私の夫は、兵庫県淡路島の遺跡調査の折、それらの破片を発掘したのをきっかけにその存在に気づき、輸出されたタイルの行方を記録に残そうと現在各国に出向いて調査をしています。私はその旅の「コーディネーター」兼「通訳」として同行しているのですが、日本の歴史的な側面やその地の人々と触れることもあり結構楽しんでいます。

今回ご紹介するのは、アフリカ、ザンジバル島でのタイル旅行記です。ザンジバルは、インド洋に面した島で、そんなところにまでなぜ日本のタイルが、という思いでしたが、そこにはさまざまな歴史がありました。ザンジバルは戦前まで日本商船がヨーロッパへ行く際の重要な寄港地で、そこには数名の「からゆきさん」がいました。ご存知の通り、長崎地方から東南アジアへ「ある仕事」に行った女性をそう呼ぶのですが、年を重ねるとその「仕事」も難しくなり、またその職種ゆえ日本に帰ることもままならず、西へ西へと流れていったと言われています。その中の数人がザンジバルに住み、寄港する日本船へ物資の供給を商いとしていました。その中で、日本のタイ

ルも扱っていたようです。当時ザンジバルは独立国でインド系などの商人が裕福な生活をしていました。彼らはその財の証として日本製のカラフルなタイルを家具等に使っていました。さらには墓にもタイルの装飾を施していて、今回はそれらの痕跡を発見することに成功しました。島内の世界遺産に指定されたStone Townと呼ばれる古い町並みの一角に墓地はあり、その中でも特にりっぱな古い墓に一部タイルが残されていました。タイルの裏面をみるとそれを生産した会社の刻印が残されている場合が多く、またその形状で時代も特定することが可能な場合があります。たとえばタイルは剥がされてすでにそこに無くても、刻印が剥がされた壁面側に残っていることもあります。今回も、その手法で日本製のタイルと断定できるものもあり、夫とこの調査へ招聘していただいた長崎大学の増田研准教授は大興奮でした。ザンジバルは、世界的に有名なロックグループ「クイーン」のボーカル、フレディ・マーキュリーの出身地でもあります。島には今も彼の生家や彼の名前を冠したレストランがあります。彼の家族もまたインド系住民で、ザンジバルで政変があったときにイギリスへ家族とともに逃れたと思われます。その政変の折、タイル装飾は華美とされ、ザンジバル島内の多くのタイルが剥がされ売却されたのだらうと現地の人が説明していました。



私は調査にも興味を覚えましたが、それ以上に感動したのは子供達の英語サークルです。現地語はスワヒリ語ですが、やはり英語は少しでもいい職業に就くために必要です。私が訪れたのはボランティアで運営されているサークルで、照明設備も不十分、教材もない場所で、夜に大勢の子供達が集まり勉強しています。みんな目を輝かせ、一生懸命知っている単語を駆使して私に話しかけてきます。とにかく話したくて仕方がないというふうに。この気持ちがきっと英語上達には不可欠であろうと痛切に感じました。子供達と1時間余り過ごした

後、外へ出ると満天の星で、天の川がびっくりするほどはっきりと見えました。あれほど多くの星を見たことはありません。街灯が少ないこともあります、空気がきれいなせいでしょう。本当にきれいでした。

島の東側に位置するパラダイスビーチと呼ばれるビーチで、30年近くコテージのような宿泊施設とレストランを一人で営んでいる日本人女性とも会いました。素晴らしい景色が気に入って、役所と交渉して電気や水道を引くところから始めたと言っていました。現地の人に仕事を提供し、観光客だけでなく調査等で島に滞在する日本人に刺身などの日本食を出して、ある種「オアシス」的存在となっているようでした。このように今回も日本から遠く離れた島に詰まっている数々のストーリーに触れることができる旅でした。



学会シリーズ本紹介

エコクリティシズム研究のフロンティア 1

『北米先住民作家と〈核文学〉——アポカリプスからサバイバンスへ』（英宝社、2019 年）

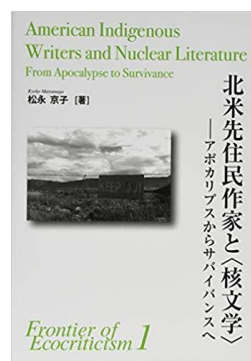
松永 京子 著

核文学と先住民文学を結ぶ重要な分野として出版が待望され、その期待に十二分に
応えてくれた快著である。「あとがき」にあるように、2006 年ネブラスカ大学大学院
での博士論文を土台にした本書は、その後 12 年にわたる継続的で地道な研究活動が
反映された読み応えのある内容となっている。全体構成は、序章、終章を除くと 6 章
からなる作品論で、先住民文学の代表的な作家群（サイモン・オーティーズ、レスリ
ー・マーモン・シルコウ、シャーマン・アレクシー、ジェラルド・ヴィゼナー）に、
原子についての革新的なポエティクスを展開したマリルー・アウィアクタを加えた、
〈核〉に係る主要作品に焦点を絞って考察されている。全章を通して、アポカリプス
の言説（終末論的ナラティヴ）やニュークリアリズム（国家の安全保障を名目に核兵
器を擁護する思想）といったマスターナラティヴ、植民地主義や「核の植民地主義」への抵抗と挑戦が試みられ、
部族および部族文化のサバイバル、ひいては地球全体のサバイバルという太い水脈に収斂されていく。先住民作
家と共有された著作の基本姿勢には揺るぎがない。

序章では、〈ニュークリア・アポカリプス〉（終末論的思想に基づいた核や原爆による終焉）が修辭的戦略とし
てのエコロジカル・アポカリプスとの関連で考察されるなど核文学批評の歴史と先住民文学に描かれた〈核〉が
詳細に語られ、その背後にあった先住民と核軍事・核産業との関連が追及される。その後の章ではまず、核の植
民地主義が土地簋奪の歴史の延長上にあることを指摘し、保留地のウラン鉱山の汚染被害の語りなどで「核の植
民地主義」の犠牲者となった先住民の存在を顕在化させる。また、「儀式」、「暦」、蛇の表象、ゴーストダンスと
いった部族的な歴史的文化的コンテキストの中で〈核〉を捉え、汎部族的な〈核〉のナラティヴへと語り直す。
また、先住民とアジアを結びつけたトランスパシフィックな視点からアジアと南西部を結ぶ移動円環構造に着
目し、さらにアフリカ大陸へと表象空間を拡大する中で時空間を超えた〈核〉の象徴性を考察する。さらに原子
の新しい視点を導入し現代医学や化学テクノロジーの近代科学のマスターナラティヴに対する新たなヴィジョ
ンを提示し、空洞化した〈平和〉の概念や表象を脱構築し、核のポリティクスの現状維持に利用されてきた表象
やナラティヴに対抗する手段としての〈ニュークリア・サバイバンス〉の可能性を志向するなど、「多様な場所
の歴史や文化のポリティクスが複雑に交錯する地球規模の言語空間」として、原爆や核の言説を、既存の文学研
究の枠組みを拡張してより包括的に捉えられていく。

各テーマについて詳細な歴史的社会的背景を提示し、入念な資料調査による客観的事実によって問題点が明
らかにされ、〈核〉という多面的なテーマに対する文学的批評に説得力を与えている。明解な文は読みやすく広
い読者層に有益な文献ともなっている。研究者のみならず多くの人には是非一読を勧めたい作品である。

横田 由理（元 広島国際学院大学）



◆◆◆◆ 大会報告 ◆◆◆◆

第 32 回 SES-J 大会報告

2019 年 8 月 10 日 (土) 9 時 50 分～17 時 20 分

サテライトキャンパスひろしま (広島県民文化センター5 階)

〒730-0051 広島市中区大手町 1 丁目 5-3

塩田 弘 (広島修道大学)

第 32 回大会は、開催の数日前には超大型台風 10 号 (クローサ) の直撃が心配されていたが、直前になって台風は小笠原諸島近海でほとんど停滞し、遠方から駆けつける会員の皆様も影響を受けることなく、無事に盛況を呈することとなった。その後、台風が広島を直撃し、交通機関の大きな乱れを招いたのは五日も後のことであった。

第 32 回大会が開催されたのは、2019 年 8 月 10 日 (土)、広島市中心部にある「サテライトキャンパスひろしま」であり、会場使用にあたっては栗原武士氏のご尽力があった。本研究会のホームグラウンドである広島での大会とあって、刺激的な個別発表、ワークショップ、シンポジウム、特別講演があり、活発な質疑応答が繰り広げられた。

大会は、岸野英美氏の総合司会のもと、伊藤詔子会長の開会の辞で始まり、午前中は研究発表二題とワークショップがあった。最初に、菅井大地氏の司会で、西 亮太氏の「(ポスト) 冷戦の文化としてのエコクリティシズムとポストコロニアリズム」の研究発表が行われ、続いて中山悟視氏の司会で、湊 圭史氏が「クジラを巡る SF 的想像力のゆくえ——20 世紀後半の日米小説から」を発表され、それぞれエコクリティシズムを通じて現代文化・現代文学を読み解く方法についての新たな可能性を提示された。ワークショップは、「*Transatlantic Literary*



Ecologies を読む」として行われ、浅井千晶氏の司会・担当で、大野美砂氏、辻祥子氏、中村善雄氏が、「エコクリティシズム」と「トランスアトランティック研究」の「ダイアログ」について論じた論文を基に、その展開について紹介された。

午後のプログラムは、松永京子氏司会により、シンポジウム「カナダ文学と環境——土地と資源を巡って」が開催され、荒木陽子氏「アトランティック・カナダの資源と環境——リチャーズとキャンベルを中心に」、室 淳子氏「カナダの原油開発と先住民」、松永京子氏「海を渡るウランの物語——『寡婦の村』とカナダ先住民

文学」の発表があった。広大な土地やその資源をめぐり、カナダ文学を多面的に考察し、新たな領域を探る内容であった。

特別講演は、原爆文学研究の第一人者で「原爆文学研究会」の代表世話人である川口隆行氏が「動物たちの原爆文学」について講演された。講演では数々のスライドを用いながら、原爆では人間だけでなく動物たちも被爆・被曝したこと、そして動物たちの表象を通じて「人間性の再定義」について考える示唆的な内容であった。講演中、会場からすぐ近くの広島の地名が言及されるなど、大会が広島で開催される意義について考えざるをえなかった。

大会終了後は、会場から徒歩数分の本通「こきゅう」で懇親会



が開催された。なかなか予約が取れない人気の店とのことで、お世話をいただいた城戸光世氏、真野 剛氏にはお礼申し上げたい。このように、広島での二年ぶり大会は、エコクリティシズムについて新たな可能性を探求する盛りだくさんの内容で、有意義な意見交換の場となったことを報告する。

◆◆◆◆ 2020 年度大会情報 ◆◆◆◆

第 33 回エコクリティシズム研究学会大会

日時：2020 年 8 月 8 日（土） 9 時 30 分～17 時 30 分

場所：西南学院大学百年館（松緑館）

〒814-8511 福岡市早良区西新 6-2-92、西南学院大学東キャンパス内

<http://www.seinan-gu.ac.jp/campusmap.html>

総合司会 三重野佳子

9：30 開会の辞 伊藤詔子 会長

9：40～11：10 ワークショップ “Weirding Ecologies”

（◎デビッド・ファネル、渡邊真理子、岸野英美）

11：10～11：20 10 分休憩

11：20～12：30 研究発表（各発表 25 分、質疑 10 分）

研究発表 1： 11：20～11：55

林千恵子「地名研究は何をもたらしたか——アラスカで進む地名変更の背景（仮）」

（司会：深井美智子）

研究発表 2： 11：55～12：30

小杉世「クリスマス島の英米核実験と除染をめぐって——キリバス民間人の視点から（仮）」

（司会：松永京子）

12：30～13：20 昼食

13：20～15：20 シンポジウム「『トランスパシフィック・エコクリティシズム』をふりかえる」

（◎一谷智子、牧野理英、湊圭史 コメント：芳賀浩一）

15：20～15：30 10 分休憩

15：30～16：40 特別講演

講師：高橋勤先生 [九州大学教授、日本ソロー学会会長]

（司会：大島由起子）

16：40～17：20 総会

17：25 閉会の辞 浅井千晶 副会長

.....
18：00～20:00 懇親会

◆◆◆◆ 各種委員会からのご報告&お願い ◆◆◆◆

☆（国際）広報委員より☆

会員の出版（単著・共著）・書評・学会などの情報は、ご本人の連絡に基づき研究情報として会員にメーリングリストと HP でお知らせしますので、出版・学会については塩田弘宛て（[shiotah\(*\)shudo-u.ac.jp](mailto:shiotah(*)shudo-u.ac.jp)）に、書評については大野美砂宛て（[misa\(*\)kaiyodai.ac.jp](mailto:misa(*)kaiyodai.ac.jp)）にご連絡下さい。

☆ホームページ委員より☆

ホームページ上に掲載する以下の記事を常時受け付けています。皆様のご協力で内容を充実していきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。宛先：三重野佳子 (mienof(*)nm.beppu-u.ac.jp)

- (1) 「旅する会員」ページ：皆様の旅先や研修先などで撮られた写真を記事と一緒にお願いします。ページに載せる形に大体整えてワードファイルあるいはPDF ファイルでお送りください。
- (2) 「エコクリティシズムのテーマの概要」で、現在のテーマの他にもご提案がありましたらお願いします。出版計画委員会で掲載を検討します。
- (3) 国際広報委員に寄せられた会員の皆様の出版情報を News ページで研究情報として掲載します。
- (4) 会員の出版物に関する書評情報を HP 上に掲載します。掲載するのは、会員が執筆に関わっている書籍で、執筆者から広報委員に連絡があったものとします。

☆事務局より☆

●会費納入のお願い

年会費4000 円（学生会員3000円、シニア会員2000円）のご納入を、2020年5月末日までにお願いします。

4月1日現在で満66才以上の方はシニア会員になることができ、会費は2000円になりますので、希望者は、事務局の平瀬洋子 (danbara@mpd.biglobe.ne.jp) まで生年月日をご連絡下さい。また、ご寄附いただける場合は、その旨振込用紙の通信欄にお書きの上、どうぞよろしくお願いいたします。ご寄附については差支のない限り、会計報告にてお名前を報告させていただきます。

振込先： ゆうちょ銀行 加入者名 エコクリティシズム研究学会

口座番号 01380 - 4 - 96525

●住所、ご所属、メールアドレスの変更届のお願い

この春、住所やメールアドレス・所属等に変更があった方は、平瀬洋子宛て (danbara(*)mpd.biglobe.ne.jp) に必ずご連絡下さい。

.....

編集後記： NL4 号をお届けいたします。今号には、昨年、日本に招聘されたアメリカのハイザ教授の来日記を特別記事として掲載しました。二つのエッセイは、なかなか行く機会がないアラスカとアフリカのザンジバル島をめぐるたいへん興味深いものとなっています。学会シリーズ本紹介は、昨年出版された松永先生ご執筆の重厚な研究書『北米先住民作家と〈核文学〉』の書評です。執筆者のみなさまに心より感謝申し上げます。1 月末から続く新型コロナウイルスの騒動は、本 NL を編集している 3 月半ば現在でも収拾する気配がありません。あっという間にパンデミックとなり、世界は混乱。経済も大打撃を受けています。感染を防ぐために、教育機関では年度末・年度初めの行事の縮小や中止、臨時休校を余儀なくされ、多くの企業でも在宅勤務のためのテレワーク導入などの対策がとられていますが、人間の無力さを思い知らされ、不安が募るばかりです。みなさま、どうぞ十分にお気を付けてください。一日も早くこの事態が終息することを願っています。

(HK)

2020 年 4 月 1 日エコクリティシズム研究学会事務局発行

エコクリティシズム研究学会 会長 伊藤詔子

事務局 〒738-8504 広島県廿日市市佐方本町 1-1 山陽女子短期大学 水野敦子研究室 mizuno(*)sanyo.ac.jp

〒739-0321 広島県広島市安芸区中野 6-20-1 広島国際学院大学 平瀬洋子 danbara(*)mpd.biglobe.ne.jp

事務局補佐 〒690-8518 島根県松江市西生馬町 14-4 松江工業高等専門学校 岸野（早水）英美 khidemi4(*)hotmail.com

(スパム防止のためメールアドレスの (*) は@に変えてください。)